

シンポジウム

企業力と地域社会の活性化 ～新たなCSR、地域社会との共生～

公益財団法人秋山記念生命科学振興財団のネットワーク形成事業により発足した「社会起業研究会」（代表：小磯修二釧路公立大学学長）主催のシンポジウム「企業力と地域社会の活性化～新たなCSR、地域社会との共生～」が、2010年12月10日に開催されました。

基調講演では、「IBMのSmarter Planetへの取り組み」と題して、日本アイ・ビー・エム(株)執行役員の久世和資氏から、地球規模の課題をITの活用で解決し、地球をより賢く、スマートにしていこうというコーポレートビジョンの具体的な取り組みについてお話をいただき、事例報告では、同社と釧路地域が一緒になって進めている「スマーターフィッシュ・プロジェクト<sup>※1</sup>」について、バリューネット事業開発部長の久保田和孝氏からご報告をいただきました。

ここでは、その後に行われたパネルディスカッションの概要をご紹介します。



※1 スマーターフィッシュ・プロジェクト

釧路産の魚を高速物流で新鮮なまま大消費地に輸送し、IT技術の活用で水揚げ時の情報を迅速に伝えることで、水産物の付加価値を高めていこうという取り組み。昨年11月に、釧路公立大学地域経済研究センター、日本アイ・ビー・エム(株)、全日本空輸グループ、水産加工業の釧路丸水が中心となって、「スマーターフィッシュ・プロジェクト推進会議」が発足している。

パネルディスカッション

民間企業と地域社会の創造的共生に向けて

**小磯** 本日のテーマについて創造的な展開をどのように進めていけばいいのか、これから議論していきます。

“Design for service” という視点

**原田** これまで日本の産業は第二次産業が主流でしたが、今は第三次産業、それも新しいサービス産業の時代に入ったと感じています。また、企業力を地域社会の活性化に加えるために、どのような人材が地域活性化の主役になっていくのかということも重要で、昨今ほどこの大学も地域貢献が重要な活動の一つになっています。



原田 昭氏  
札幌市立大学学長

私ども札幌市立大学には、看護学部とデザイン学部の二つの異なった学部があります。医療と芸術という全く離れた分野を連携させようということが、一つの教育方針です。そこで、サービスのように不可視の世界を可視化するために、デザインという創造力が必要で、“Design for service” という視点を持つべきではないでしょうか。異なった分野の横断型連携教育が、これからの人材を創り上げていくと思います。

そのためにも共通のプラットフォームを作る必要があります。異分野を連携させ、互いに共同して、ある目標に向かって作業を進めていくことが大切で、サービスのデザインというものが、これからの大きなプラットフォームになるのではないかと思います。

また、これからは、隣人が病気で倒れているからご

飯を持って行ってあげようというような、昔は無償だったサービスが、すべてビジネスとして成立するという前提で社会が構築されていくでしょう。また、フェイス・トゥ・フェイスでなくてもビジネスが発生しています。つまり運ぶモノや情報、メディアが存在する時代です。このサービスのネットワークに、企業のビジネス力が積極的に関わることで、サービスのシステムが非常に高度化していくと思います。

### 異なる分野を結び付けることが新しい価値を生む

**山崎** 道内ではさまざまな地域再生の試みが行われていますが、さらにステップアップするためには、いかに付加価値を付けて内外に発信するかが課題だと思います。



**山崎 幹根 氏**  
北海道大学公共政策大学院教授

北海道大学公共政策大学院と連携している喜茂別町が、5月に札幌市西区の発寒商店街のイベントで、地元産野菜を販売するという試みをしたのですが、非常に盛況で、一見無関係な地域や組織が結びつくことで、両者にメリットがあるというユニークな実践でした。芽室町では中心市街地活性化のために、呼路歩来（コロポックル）という小さな店をオープンさせています。ここでは芽室で作られたすべて産品が一堂に集められ販売されていますが、カタログでギフトセットも売り出しています。じゃがいもにスモーク大豆、金時豆や煮豆などを組み合わせていますが、一見ばらばらなものを組み合わせることで魅力が拡大し、ギフトセットとしての価値が生まれている例です。

多くの自治体に魅力的な資源があり、それを生かす試みはしていますが、皆さんが苦勞しているのは、いかにそれを高次のステージに持っていかということでしょう。異なる要素を結び付け、新たに魅力を増すようなマッチングの作業が一つのカギになります。

また、顔が見える範囲で展開するコミュニティビジネスも重要ですが、大きく発展させるために国内のみ

ならず、アジアをはじめとした海外に展開していくことも重要です。その際は、産学や地域との連携、ネットワークづくりが非常に重要になります。

### ネットワーク形成事業の実践から感じたこと



**秋山 孝二 氏**  
公益財団法人秋山記念生命科学振興財団理事長

**秋山** 当財団は、ライフサイエンスの研究助成を中心としていましたが、7年前から市民活動助成を始め、2年前からは市民活動の横断的連携の場を提供していきこうと、ネットワーク形成事業をスタートさせました。

その取り組みから感じているのは、従来のこだわりが障害になって一緒にテーブルにつくことの難しさがある点です。先ほどプラットフォームという言葉がありましたが、公的機関の方や研究者などは、そのような場に着くことにちゅうちょすることが多いように感じます。非常に残念なことです。ただ、勇気を持って一緒にテーブルについて多くのことを学ばれている方もいます。特に、ネットワーク形成という点では、調整や支援役としてのアカデミックセクターの存在が非常に重要だと感じます。

また、ソーシャルビジネスという点で、北海道に今欠けているのは、金融部門の参画だと思います。金融セクターが関わることで、信用創造など、大きな事業展開が可能になるだろうと思います。

当財団もささやかですが、ネットワーク形成事業プロジェクトを継続していくことで、新しい担い手、それぞれのフィールドで活躍する人を支援していければと考えています。

### 違ったものを組み合わせ付加価値をどう生むか



**久世 和資 氏**  
日本アイ・ピー・エム(株)執行役員

**久世** 皆さんのお話には共通のキーワードがあったと思います。原田先生からは異分野の横断化とその人材をどう育成するのかということ。山崎先生からも違ったも

の組み合わせや結び付けで、新しい価値を生み出すということ。また、秋山理事長からは、ネットワーク形成という点で、担い手をサポートする人たちの重要性を感じました。以前、小磯先生から日本でベンチャー企業が育ちにくいという話を聞いたことがありますが、新しい取り組みをつぶさずに、社会の中で育てていくことがとても重要です。

今日は地域が一つのテーマですが、まずはそれぞれが地域の特色をよく知ること、それをどのようにアピールするか、違ったものを組み合わせで付加価値をどう生むかということがポイントだと思います。

わが社で若い人たちと話題にしたテーマの一つに、スマートな農業<sup>※2</sup>があります。農業でできることを議論したのですが、面白いアイデアが出ました。例えば、農業を仮想の世界で体験できれば、いい経験になります。農業使用の有無など細かいことまで選べて、しっかり世話をすればいい野菜が育つというバーチャルな世界が体験でき、それを実世界と組み合わせることもできるでしょう。また、北海道農業というバーチャル農業に100万人の会員がいて、カメラを付けておくことで世界中の会員が注意深く畑をチェックしてくれるというようなこともできます。それが北海道産の野菜に興味を持つきっかけになるかもしれません。

また、エアコンがネットワークにつながれば、観光エアコンというものも考えられます。リモコンで世界の避暑地から選べば、そこと同じ湿度と強さで風が吹いてくるというわけです。テレビを組み合わせれば、その場所を歩いているような気分も味わえます。そんなふうに観光資源をアピールすることができます。

秋山理事長から金融のお話がありましたが、例えば、インターネットを使って、摩周湖の水をきれいにするために水1リットルに対して1,000円出資するという運動を、世界中の人たちに対して発信することもできます。お金の動きがないと、大きな仕掛けはできません。そこに若い人たちの新しい発想と違う文化の人たちが集まれば、大きな力になっていくのではないで

しょうか。今は技術インフラが進んでいるので、地域から世界に出ていくくらいの心意気で取り組めば、北海道が元気になって、日本も元気になるでしょう。そこにビジネスチャレンジがたくさん出てきて、地域の活性化につながっていくと思います。

### 企業の力と地域の力の共生

**小磯** ありがとうございます。

北海道が持っている資源や環境の魅力と価値を、IBMの持っているノウハウと組み合わせることで、地域活性化に結び付けることができないかという視点から、今IBM、ANAと「スマーターフィッシュ・プロジェクト」に取り組んでいます。さまざまな地域の課題がある中で、大企業の力を地域の活性化に結び付けていこうという考え方です。

社会的な課題に向き合う中で、大企業の持っているノウハウや人材、資金力は大きな力になります。これからは困ったからといって政府の仕組みや政策で解決するだけでなく、企業のビジネス展開と地域の課題解決を共存させていく仕組みづくりが、新しい社会システムとして必要だと思います。

また、今日パネラーの皆さんから、異なる分野が結びつくことで新しい価値が生まれてくるという意見がありました。これを地域の新たな仕組みとしてどうやって安定的に定着させていくかが、これからの課題だと思います。その中では、アカデミックな機関として、大学の役割の重要性を感じています。

企業の力と地域の力の共生は、ある意味で「新しい公共」という言い方ができると思います。また、それはまさしくネットワーク形成といえるでしょう。異なる分野を有機的に結び付けて、そこから新しい価値を生み出し、その中から地域の活性化に結び付けていく動きが出てくることを期待したいと思います。



小磯 修二 氏  
 釧路公立大学学長・社会  
 起業研究会代表

#### ※2 スマートな農業

日本IBMの提唱する“Smarter Planet”コーポレートビジョンの一環としての農業の活性化への取り組み。